

17 文化・学芸

(第三種郵便物認可)

寄稿 県立博物館・美術館学芸員 浦川 和也

職人が塗り忘れた青



月曜 衣・食・住

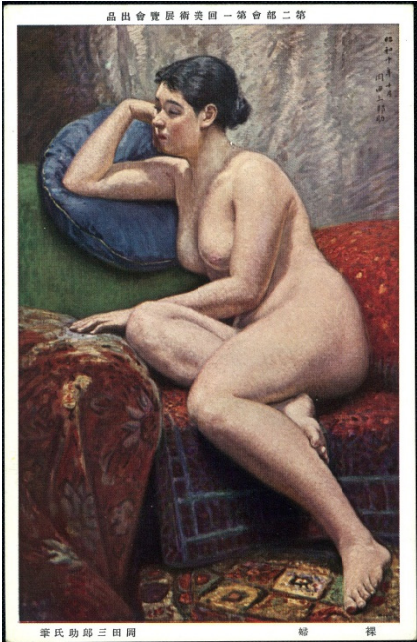
火曜 文化・学芸

水曜 若者・教育

木曜 余暇・趣味

金曜 文化・学芸

土曜 映画



品出命覽展術美回一第部二第

氏助郎三田岡

部



【図版②】絵はがき「第二部会第一回美術展覧会出品 裸婦 岡田三郎助氏筆」(個人蔵、14.1×9.1㍉)

※右の【図版②】の絵葉書は、四周に白い縁(フチ)がついており、その縁の部分に「第二部会第一回美術展覧会出品」「裸婦 岡田三郎助氏筆」と印字されています。寄稿にあたり調整不足で、縁が映っていませんでしたので、上に貼りつけました。

岡田三郎助「裸婦」の絵はがき



【図版③】高柳種行「岡田三郎助《裸婦》模写」(個人蔵、33.3×24.2㍉)

一枚の古い絵はがきがある(図版②)。佐賀出身で洋画の巨匠となつた岡田三郎助(1869~1939年)の最高傑作「裸婦」がカラー印刷されている。その上端に「第二部会第一回美術展覧会出品」、下端には「裸婦 岡田三郎助氏筆」と印字されている。

岡田は「裸婦」(図版①)を1935(昭和10)年10月に完成させ、帝展展組をめぐり「帝展騒動」の中で若手・中堅洋画家が開催した「第二部会展」(同年10月15日~11月10日)に贊助出品した。図版②の絵はがきはこの時に作られたものだ。一部会展では他に「花束 吉村芳松氏筆」と印字された絵はがきもある。また、一部会展以前の文展・帝展等の絵はがきも多数見られる。当時は展覧会の出品作品で絵はがきを作る業者が存在していたのだ。

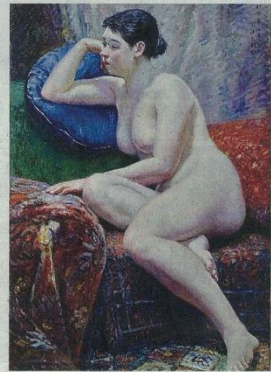
当初は石版印刷やコロタイプ印刷(写真印刷に近い網点のない印刷)の絵はがきが主流であった。コロタイプはモノクロ絵はがきに一枚一枚彩色を施した手彩色絵はがきも、「美人」「名所」等をテーマにしたものでよく見られる。彩色職人の手による水彩の淡くやわらかいタッチが特徴である。本来、暮末・明治初期から写真に手彩色があり、明治後

期からの絵はがきにもその技術は引き継がれた。しかし、図版②の絵はがきは手彩色ではなく、カラーのオフセット印刷(撥水性を利用した平版印刷)である。ルーペで見れば、現在の印刷物と同様に赤・青・黄の三原色と黒

のドットが色を作り出しているのがわかる。カラー印刷になるわけだ。1920年代に日本でもオフセット印刷が普及し始めると、この方式によるカラー印刷の絵はがきが多数発行されるようになった。

カラーの印刷物を作るには、原板は当然カラーでなければならぬ。しかし「一部会展(昭和10年)」当時、カラー写真はまだ実用化されていなかった。だとすると、図版②の絵はがきのカラー原板は、どのようにして作ったのか? まず、作品(図版①)を撮影してモノクロ写真をプリントし、それに例の彩色職人が、作品を見ながら、できるだけ再現的に下地のモノクロ写真が見えなくなるまで着色した。そのカラー画像を原板として色分解し、四つの版を作ったのだ。つまり図版②の絵はがきの「裸婦」は、彩色職人による写しの複製ということになる。

図版①の岡田三郎助「裸婦」は、図版②の絵はがきとともに、県立博物館と写真室(画家たちのヨーロッパ展)で1日まで公開している。



【図版①】岡田三郎助「裸婦」(個人蔵、99.8×65.5㍉)